

# 70年代韓国における流言

---

## Research Notes

島村恭則

### 1 はじめに

現代社会における民衆の語りと意識の研究にあたって、流言の分析は有効なアプローチの一つであるが、<sup>(1)</sup>朝鮮半島の社会における流言についての研究は、日本植民地時代の流言の内容を分析したもの[李 1987]があるのみで、未発の領域となっている。

筆者は、近代以降の韓国社会、とりわけその都市社会において語られる口頭伝承についての民俗学的研究を開始しようとしているが、本稿ではその準備作業として、1970年代の韓国・ソウルにおける流言のあり方について事例の整理を行ないたい。

韓国の70年代は、1962年以来大統領として独裁支配を行ってきた朴正熙が、彼の軍事政権のさらなる強権化・恒久化をはかろうと、71年に非常戒厳令をしいていわゆる「維新体制」を開始し、その後73年の金大中事件、74年の朴正熙夫人殺害事件などを経て、79年の朴正熙暗殺に至るという政治的激動の時代である。そしてこの70年代は、民衆にとっては、民主化を希求して権力へ対抗する戦いの時代であったとされる[池 1995]。

ところで、この当時日本において雑誌『世界』に連載され、その後再編集ののち岩波新書に4冊本としてまとめられた「韓国からの通信」シリーズ（以下〈通信〉と略称する）は、この時代の韓国の社会・政治状況を示した資料として貴重である。

〈通信〉の連載は、1973年5月に開始され、1988年3月まで続けられた。内容は、韓国にいる「T・K生」なる著者が、韓国内の政治状況を日を追って記録し、これを日本の読者に向けて伝えてくるといふ文字通りの通信である。T・K生については、「韓国知識人」[T・K生/「世界」編集部編 1974:i]とされるだけで、それ以上のことは明らかにされていない。これは、非常戒厳令下という状況の中にある著者の身の安全を考えた場合、当然のことであつたろう。<sup>(2)</sup>

ところで、この〈通信〉の内容には、流言についての記述がすこぶる多く含まれている。岩波新書の4分冊をすべて検討し、流言関連の記述を抜き出してみると、その数は95箇所となり、流言資料の宝庫の感がある。もちろん、〈通信〉の記述における編集者サイドのイデオロギー的なバイアスを考慮した場合、〈通信〉の内容を、当時の社会状況についての全面的に客観的な描写だと断言することはできない。<sup>(3)</sup>したがって、資料の持つこうした限界性について、我々は認識を怠ってはならないが、そのことを承知した上で、当時の流言のあり方を知るための一つの手がかりとして、これらの流言関連のデータについて検討してみることは、なされてもよいであろう。<sup>(4)</sup>

以下、〈通信〉中の流言関連データについて、整理と検討を行なってゆく。

---

なお、日本語の「流言」「流言蜚語」に当る語は、韓国語では、「流言ユオン」「流言蜚語ユオンピオ」となっている。

## 2 流言の様態

### (1) 流言のるつぼ

70年代、ソウルの街は流言であふれかえっていた。それはたとえば、

#### [事例1] 1974年／6月

おそろしいことであるが、いまソウルに流れている最大の流言蜚語を一つ伝えよう。『クリスチャン・サイエンス・モニター』の記者の勇気（中略）には韓国国民が深く感謝していることを（日本の読者が）伝えてもらいたい。とくに彼女が、朴正熙という人は反共の名において実は南を瓦解させ「南朝鮮武力統一」または「南朝鮮革命統一」という共産主義極端論者たちの路線を助けていると書いてくれたと聞いて、多くの知識人たちが感動している。いま、そのことが韓国人のもっとも言いたいことと言えないことだからである。実は、この頃朴正熙が北の首脳と黄海道のある秘密場所でランデブーをしたという噂がまことしやかに流れている。これが、いま流行っているもっとも恐ろしい流言蜚語である。それは事実を語っていないと私は考える。しかし、それはある種の真実を語っている。実に不幸な事態ではないか。朴正熙という人物は常に裏切る人、かくれて悪だくみをする人、国民に背を向ける人、政権維持のためには何でもしてかす人というイメージがこのような流言まで生み出している。[1:215]<sup>(5)</sup>

#### [事例2] 1973／12

（反政府運動のかどで拘束されていた学生二二名が大統領の指示で釈放されたのち）この学生釈放について私（T・K生）はつぎのようなメモを受け取った。「学生三名が死亡、二名が重症。電気拷問の結果であるという噂がとんでいる」。このソースによれば釈放された二二名中一五名が軍隊に入営させられたと報道されたが、その中にはこの（死亡・重症の）五名が包含されているというのである。入隊者の家族たちも彼らの行方を知らないでいる。今ソウルの街をこの噂が流れている。このようなことがほんとうは学生釈放、そして入隊の裏面であるかもしれない。外国の声によっても彼らの行方を確かめて公表してもらいたいものである。こんな噂があるのも、ソウル大学の崔鍾吉教授がCIA（中央情報部）で疑問の死をとげたからであるといえよう。物騒な世の中である。[1:93-94]

という状況だった。

このような流言は、折々の政治的な動きに連動して発生しているが、これは朴正熙夫人陸英修の殺害や朴正熙の暗殺の直後にピークを迎えている。

#### [事例3] 1974／8

（朴大統領夫人殺害について）さまざまな流言蜚語がすぐ民衆の言葉として流れ出している。

亡くなった夫人は仲たがいをしてしばらく実家にいていた。光復節という重大な日に金鍾泌が休暇をとってソウルにいなかったのも不思議だ。夫人には二発の銃弾が当たったともいうが、それはおかしい。政権内の内部抗争かもしれない——こんな流言蜚語は事実を語ってはいないと思う。しかし、そのことを超えて、ある真実を指し示してくれることに、その凄さがある。これほどまでに朴政権が不信の対象になっているというところに重大な問題がある。[2:44-45]

#### 【事例4】 1974/8

(朴大統領夫人殺害について) 奥深いところからむ女性に関するスキャンダルの噂が広まっている(中略)。また、いまは幽明境を異にした方に政治・経済の私組織があったとかという噂(が広まっている)。[2:49]

#### 【事例5】 1974/9

ある新聞記者が私に囁いてくれたつぎのような言葉は相当意味をもっているのかもしれない。狙撃事件だと聞いてまずわれらは政府のショーだと思った。しかし夫人が亡くなったとなると首をかしげざるをえなかった。それでも勢力抗争の犠牲という噂が決してないことはない。もちろんスキャンダルにからんでいるという恐い話もあるが(中略)。多くの噂が流れている。こんな巧妙な仕業全体に、やはり金大中氏事件の場合のように手のつけられない日本側の誰かも協力しているだろうと推測をたくましくする人々もいる。[2:50]

#### 【事例6】 1974/10

一時は獄中にいる人々を釈放するという噂もあったが、この頃はやはり朴政権は弛めたら崩れるという悪夢から解放されえないとみられている。[2:82]

#### 【事例7】 1974/11

実際、朴大統領夫人の死はまだまだ政治化された噂を絶やしていない。(中略)夫人に最後の手術を施した医師は行方をくらましているそうではないか。夫人は絶命の時、鋭い悲鳴をあげたとまでまことしやかに噂されている。[2:100-101]

#### 【事例8】 1979/11

ついに、一〇月二六日の夕、朴正熙氏は倒れた。(中略)明日は朴正熙氏の国葬というのに、ソウルの街は流言のるつぽである。事件に対する戒厳司令部合同捜査本部の発表などは、この噂、この流言の後を追っているようなものである。金載圭中央情報部長の単独犯行という説を信じようとする人はほとんどいない。一人でそんなことができたはずがない。[4:96]

#### 【事例9】 1979/11

(駐韓アメリカ大使が召還され、また釜山、馬山などで民衆蜂起があったが) 朴正熙の暗殺はこれらの一連の状況と決して無縁であるはずがないというのが、流言を生み出す国民の心理であ

る。それは当局によって発表された「事実」を打ち砕いていった。[4:97]

#### 【事例10】 1979/11

ここで、いままで耳にした流言のいくつかを紹介してみよう。

CIAの金(載圭)が朴正熙をその晩、青瓦台近く宮井洞のCIAの建物に招待した。それは、南山にあるCIA本部があまり遠いというので朴の命令で建てられたものである。CIA経営で高級レストランもかねている。戒厳司令官鄭昇和は、この事件が起こる間、待たされていた。彼と軍部の重要パートがこの事件に関連している。金が軍部やアメリカ軍の保障なしにこのようなことをやっているはずがない。まず坐っていた朴が撃たれ、次に立ちあがった車が撃たれた。その銃声と共に、配置されていたCIA要員たちが室外にいた大統領警護員たちを殺害した。それから金は鄭に会って鄭の自動車で国防部まで行き、最初の閣議は金の主催で行なわれ、金が鄭を戒厳司令官に任命した。その直後、鄭は金を逮捕させた。新聞の論調は最初の二日間は金を非難していなかったが、その後、変わってきた。CIAはいま、全く機能を停止している(中略)。

朴正熙を殺害した重要な理由は、朴が車とともにデモ群集に対して無差別銃撃を加えようとした決意をしていたためであった。釜山の民衆蜂起には多くの市民が参加した。そのような蜂起がソウルでは一〇月二九日に計画されているといわれた。釜山に空挺隊一〇〇〇人を送りこんで戒厳令の施行に当らせたのも車である。彼は空挺隊の出身であり、いまもその部隊に対して絶大なる影響力をもっている。彼はソウルで事が起こればたとえ一〇万人ぐらい殺してもかまわないという決意でいた。これに対して金載圭は釜山の状況なども詳細に知っていたために反対した。[4:97-100]

#### 【事例11】 1979/11

政治的空白が長びけば、いやがおうでも軍は政治化され、良心的な軍人たちが憂えるように安保が問題になるかもしれない。これからの政治の行方についても、もちろん多くの流言が流れコメントが加えられている。それらのいくつかをここに記してみたい(中略)。

総選挙は来年の三、四月頃であるといわれる。釜山の民衆蜂起ではまだ七五〇名が投獄されたままであるが、四五名ぐらいが政治犯としてではなく、公共器物の破壊などを問われて刑事犯として取り扱われるといわれる。CIAは将来、その最初の段階のように対共関係だけを担当する機関に縮小されるであろう。戒厳令はどんな形でも臨時大統領が選出されるまで、三ヶ月は続くだろう。間もなく大学も再開されると思われるが、学生の動きは重大である。もしも彼らが動き出せば学校閉鎖も辞さないというのが軍部の態度であるらしい。内閣はその間、崔圭夏大統領権限代行と盧載鉉国防長官以外は大部分更迭されるという噂があるが、アメリカ側はこれに反対であるという。[4:101-104]

以上のごとく、流言の連続であったが、この場合、上記の事例のうち、とりわけ【事例10】などは、T・K生によってあきらかに流言と位置付けられているものの、ほとんど、あたかも事実関係についての記録と見紛うほどの情報量、密度である。なぜこれが流言なのか、と思われるかもしれ

ない。しかし、これはやはり流言なのだ。なぜならば、次節でふれるように、この時期の政府の発表や新聞報道は、全く情報として信頼されていなかったからだ。流言だけが「信じる」べき情報だったのである。流言という我々はこれを、公的な報道、情報に対する副次的な情報のように考えがちである。しかし、そうではない。この時代の状況下では、民衆にとっては流言のほうがメインの情報だったのだ。この事例に見られる情報内容の細かさは、(その真偽はもちろん別問題として)そのことを物語っているのである。

## (2) 言論統制と流蜚通信

さて、以上見てきたように、ソウルはまさに流言のるつぼであった。では、なぜこれほどまでに流言が生まれたのか。その要因は、この時代の徹底した言論統制に求めることができる。

それは、「(1972年)十月十七日の夕方から突然始まった戒厳令下の韓国の状況については、誰も語る自由をもっていない」[1:1]というほどのものであり、「大統領はすべての政治的活動、そして新しい憲法にたいする支持や反対に関するすべての活動を禁止し」、「…検閲は厳格である。新聞雑誌は検閲されたことが分からないようにブランクを残しておくことを禁じられ」[1:1]ているという状況だった。だから、

学生たちの間には最近「韓国には韓国の新聞がない。日本の新聞が韓国の新聞だよ」と皮肉った言葉がある。これは金大中氏事件の時から出はじめた言葉である。学生たちの声も韓国では報道されないで日本で報道されているという噂である。[1:78]

ということになるのであり、また、したがって、読者は、新聞を読むにあたって、「行間や紙背を読む姿勢で相当の註釈をほどこさねばならない」[1:41]のであった。この場合、その「註釈」を人々が語りあえば、それは流言となった。以下にあげる記述がその事情をよく示している。

### 【事例12】 1977/4

政府の発表も新聞の記事も信用されないところでは、このような秘話とか野史が栄えるわけである。或るジャーナリストは「この国には正史はなく、秘史や野史があるだけだ。その野史を多く知っている人が真の歴史家だよ」と皮肉るのであった。この正史と野史の皮肉は、いまソウルの知識人の間ではやっている一つのユーモアである。[3:187]

### 【事例13】 1977/5

韓国では相異なった二つの歴史が流れている。一つは新聞の活字になる歴史である。そしてもう一つは、新聞の活字になることのない、いわば流言の歴史である。活字にならない歴史は、実は耳にし口にただけでも牢屋行きである。

活字になる歴史は、「戦闘機の他の武器はすべて国内生産」であると大きく謳い、「一部兵器輸出推進」とまで語っている。武器の量産でも北を圧倒しているというのである。武器生産についてはいまままで秘密にしていたが、アメリカ軍撤収の問題とからんで突然このような発表をしたの

である。これに対して活字にならない流言は、次のように答えるのである。

昌原に日本とアメリカ両国の兵器産業が集まった。日米とも国内事情があるから、ここから世界への武器輸出をしようとするのだ。ベトナム戦争への協力がこんなに転身をとげた。このおかげで朴政権は日米の兵器販売勢力に支えられていると思っている。[3:188]

#### [事例14] 1973/12

十二月十六日キッシンジャーは朴正熙と四〇分語り合った。その内容は何であったらうか。新聞にはある高位消息通が伝えたところとしてつぎのように報道された。

- 1 南北対話を支持する。
- 2 韓米相互防衛体制を維持する。
- 3 中国で駐韓「国連」軍の撤収、減縮について語っていない。
- 4 韓国の経済発展は有益で鼓舞的である。

しかし、実際には、1 休戦協定を平和協定に結びなおす、2 一〇万の減軍を行う、3 もう少し国内の安定をはかる——といったことを、朴正熙氏のコメントをも求めず、一方的にキッシンジャーが要請したのだという。噂ではあるが、十分に推測しうることではないだろうか。

[1:91]

物事の事実がわからないために、人々は流言によって「真実」をさぐろうとする。事実関係が不明瞭なところに流言が発生するというのは、流言の理論的研究においてよく知られているところだが[R. L. ロスノウ/G. A. ファイン 1982, ジャン＝ノエル・カプフェレ 1988], 韓国の場合、このような流言による真実追求の行為を、人々は「流蜚通信ユピトンシン」と呼んでいた。最近ではあまり使われない言葉だが、70年代当時大学生であり、民主化運動にも関与していた人々によれば、「流蜚通信ユピトンシン」とは、「新聞などマスコミの報道が信用できず、また個人間で政治について語ることが許されていないという状況の中で、地下通信として情報（流言）が人から人へと伝達され、また、人々がそうして伝わってきた多くの流言をつきあわせ、解釈を重ねて、何とか『真実』を推測しようとする一連の過程」、あるいは、「厳格な言論統制のもとでは『真実』や自己の見解を直言できないため、他者によってもたらされ偶然耳にしえた流言という形をとって、それら『真実』や見解を語り伝えてゆく行為」などを総称する言葉であったようだ（以上の言説は、彼らの発言をふまえた上での島村によるまとめ）。厳しい言論統制下では、「流蜚通信」こそが唯一「信じる」に足る情報であり、また人々が政治について語るたった一つの方法であったのである。以下の事例は、「流蜚通信」の実態をよく伝えているものである。

#### [事例15] 1973/7

これからスパイ事件も内乱罪もふえてくることであろう。方々でピラがばらまかれるがそれにも内乱罪が着せられる。その一例が（反体制運動家の）朴炯圭牧師などの逮捕であろう。復活祭の集会で（同牧師が）四〇〇枚の政府批判のピラをばらまいた。その内容は「神よ、愚かな王様を憐れんで下さい」というようなものであった。いかなる批判も許されない情勢ではアングラの

ピラぐらいが民の心を表出する唯一の道であろう。それを、(CIAは、朴炯圭牧師が)その会合に集まった八万人ぐらいの信徒を引き連れて中央放送局と中央庁を占領しようとたくらんだことになってしまった。

ソウルではそれにたいしていろんな解釈、流言蜚語が行われている。CIAは、朴炯圭牧師ら僅か一〇名ぐらいの人員で、集会に集まった八万の信者を率いて政府機関を占領しようとしたといっているが、ピラの内容にはそういった煽動の文句は見当らない。CIAは、礼拝に集まった人々がそんなに瞬く間に組織されると思ったのだろうか。CIAは、彼らが軍隊に抵抗して政府機関を占領できると思ったのだろうか。政府は思う通りにならない唯一の領域として取り残されているキリスト教会にも手をつけようとするのか。このような、いろんな噂が飛び注目を呼び起こしている。[1:19]

#### [事例16] 1973/11

ソウルの街では現代版の「残酷物語」の噂があとを絶たない。もちろんそれは韓国CIAに関する話である。ソウル大学校法科大学崔鍾吉教授がCIAの中で死体として発見された。「トイレの建物から投身自殺」というのがCIAの発表である。誰もこれを信じない。拷問による死だと信じている。

そして、真実は、つぎのようなことだといわれている。十月十七日に、法科大学のデモや同盟休校などの一連の事態について、六人の法科大学の幹部教授が協議したのだが、その時、崔教授は「こんどは教授も学生の側に立つべきであって、学生たちを処罰すべきでない」と主張したという。しかし、誰かが密告したのであろうか、その日のうちに崔教授は連行され、拷問によって死にいたった。しかも、遺体は家族にも見せないでCIAが処理してしまった。崔教授の夫人が医師であるので、遺体を見ただけでもその拷問のひどさが確認できるだろうからだといわれている。[1:71]

#### [事例17] 1973/11

いま、こちらの学生たちは外の情報を非常に知りたがっている。金大中氏を拉致する時、第一の計画は韓国空軍機によるものであったという噂もある。それをアメリカ空軍がおっかけたというのである。だからそのアメリカ軍が金大中氏を拉致して行く船を止めて何か大変な取引をしたらしいという噂である。新聞による情報が極度に制限されているので民衆の想像力だけがこんなに活発に働く。[1:78]

### (3) 命がけの流言

さて、こうした流言の流通に対して、政府が黙っているはずはない。流言は厳しい取締の対象であった。1974年1月から施行された「大統領緊急措置(第1号)」には、その3項目目に、「流言蜚語を捏造、流布する一切の行為を禁じる」とあり、続けて5項目目には、「この措置に違反した者」とこの措置を誹謗した者は、法官の令状なしに逮捕、拘束、押収、搜索し15年以下の懲役に処する」[池 1995: 87-88]とある。そして実際、「新しい憲法に反対する「流言蜚語」を流したという

ので刑を言い渡された人々に対する報告が毎日入って来」[1：2]、「流言一つで15年懲役」[1：157]というありさまだった。この場合、反体制的な言説はすべて流言とされていたのであり、このことは、政治犯だとして逮捕された牧師に対する告訴事実として発表された次の文章を見れば瞭然としている。

**【事例18】 1973/1**

(被告人は) 1 一九七二年十月二十日十五時全州市校洞二街二二九番所在南門教会内の被告人の家の内室にて同教会執事キム・ソンチョルに「十月維新は国民投票によって通過されるであろうが、非常戒厳令は南北統一にかこつけて政権延長を計るための一つの措置である」と流言蜚語をデッチあげて流布し、/2 同月二十二日一二時一〇分頃右の居住地所在南門教会の牧師舎宅と教育館の間の路上にて同教会の信徒であるキム・イクファンに「国会解散をどう考えるか、武力で解散したことがいいことか」と発説して流言蜚語を流布し、/3 同年二月六日一時頃右被告人の家の内室にて同教会執事であるキム・ソンチョルに「今度の国民投票は通過するのが既定事実である。世界歴史からみても政治活動が禁止されている現実では明らかなことではないか。維新憲法は南北対話をかこつけた長期政権延長の措置である故、反対の意志を表すべきでありわれわれは自由民であるから自由が抑圧されてはならない。非常戒厳令宣布は統一を仮装した永久執権化の措置」だと虚偽事実をデッチあげて流言蜚語を流布したのである。[1：7]

次の事例も、やはり流言蜚語のかどで囚われの身となった人物についての記述である。

**【事例19】 1975/9**

追放された『東亜日報』の記者の一人は、ガルフ石油が朴政権に四〇〇万ドルの政治献金をなしたという英文記事を友人にみせたかどでいま囹圄の身である。そういうものが緊急措置第九号違反、不穩文書の回覧、流言蜚語の流布というものである。事実は蜚語、事実にあらざるものが事実である。この価値観の転倒が「十月維新」の仕業なのであろう。[3：20]

あるいはまた、状況は、T・K生をして「個人間の談話も流言蜚語で取り締まるというのだから、完全無欠の独裁である」[1：115]といわしめるものでもあった。こうなると、

**【事例20】 1972/11**

日本統治以来初めて民衆は全般的に言うことに注意し、個人どうしでなければ状況について語り合うことを欲しないようになった。人々が逮捕された、密偵が増加された、アメリカが監視しているというような流言が広まっている。このような流言のすべてが、(中略)いままでなかったような拘束の雰囲気をつくらうとしている。[1：3]

**【事例21】 1973/1**

しかし確かにいまの韓国の民衆の沈黙には不気味なところがある。誰に聞いてもこの頃行われ



---

ている政治の進行については語ろうとしない。その顔の表情は明らかに暗い。[1:5]

ということになり、

**【事例22】 1974/8**

韓国は常に一方の言葉だけ許されている国であることに今後も変わりはない。多数の国民は囚人のように言葉を禁じられている。この人々は死刑の覚悟をして“流言蜚語”を交わすことができるだけである。[2:40]

というように、流言を語ることは命がけのものとなっていたのである。

しかし、それでもやはり人々は語ることをやめなかった。

**【事例23】 1974/6**

それでも民衆どうしは信じあえる。まだ密告したという例はない。苛酷な政治の下を生きてきた民衆の無言の連帯である。だから民衆どうしの間では流言蜚語が氾濫している。それもできなければ韓国人は窒息死してしまうかもしれない。もちろんそれもソウルのような巨大都会でのことである。[1:214]

**【事例24】 1975/9**

この頃になってようやく私も金芝河氏（詩人・反政府運動家）の「良心宣言」や金大中氏（民主化運動家）の八・一五声明「八・一五解放の理想を実現しよう」に触れることができた。鎖国の中で一方的情報のみが強要されているのだから、このようなものは地下通信として数百人の目にしかふれないのであろう。しかし口から口へと広がってゆくであろう。[3:21]

**【事例25】 1974/1**

それでもソウルの市民は勇敢だ。どこでも「もうこれ以上やりきれないよ」という言葉が平気でいわれる。タクシーの中でも、飲食店でも喫茶店でもどこでも聞かれる。ある日タクシーの運転手が平然と話しかけるのであった。

「あなたのお勤め先はどこです。私は知らないがもうだめですね。こんなひどいことをして居坐ろうとするとは」。

もう民衆の批判の声はさしとめられないであろう。[1:116]

そして、このような中から、体制にユーモアを以て対抗するという語りも登場してくるのであった。

**【事例26】 1977/5**

（友人は）一つのユーモアを言い残すのであった。

---

---

延世大学で起こったことだ。或る学生が歩きながらビラをばらまいた。驚いてキャンパス駐在の情報員たちがかけ寄った。しかしとりあげてみたビラは単なる白紙であった。彼らもあっけにとられてしまった。一種のユーモアであり脅かしであったわけだが、この頃は内容は書かなくてもいい。白紙で十分おたがいにわかるからね。[3:192]

#### (4) 人心操作と流言

一般に、政治の領域や戦時下においては、人心操作を目的として意図的に流言が流されるとされているが[R. L. ロスノウ/G. A. ファイン1982, ジャン=ノエル・カプフェレ1988], 韓国においても、政府とりわけCIAによってこれがなされた可能性がある。ただし、可能性があるというだけであり、このことの実関係は依然闇の中にある。しかし、少なくとも、民衆側は、体制側——とりわけCIA——が流言を意図的に操作しているのではないかと思っていたし、またそう解釈せざるをえない状況があったことはたしかである。

#### [事例27] 1976/1

CIAの分裂工作はますます強まっている。人革党関係で処刑された遺家族の間にも分裂工作が進められている。一人か二人かに小さな店などを出せるように助けてやる。そしてその人々を離脱させ、口止めさせるだけではなく、CIAと結んでいるのだと自ら噂をばらまいて遺家族の間を裂くのである。[3:29]

#### [事例28] 1974/2

いまCIAは、金大中が拉致される途中、上陸地点で医者の治療を受けたが、その時、精神薄弱になる注射を受けたのだとデマゴグを流している。[1:139]

#### [事例29] 1976/6

わずか一二、三の家族によって成立した教会であるにもかかわらず、このスラム教会運動を撲滅しようと、CIAは全力をあげているようである。このサランバン教会に関係していた六、七名のスラム伝道者たちは全員が逮捕されているという。そして彼らはキリスト教ではなく共産主義を伝えているのだと、(CIAによって)それこそ堂々と流言蜚語がとばされている。[3:67]

#### [事例30] 1976/4

五〇〇名以上の大学教授を追い出したことは、韓国の大学の歴史に多くの傷あとを残すことであろう。追放された教授の一人である、或る友人は、私に次のようにいうのであった(中略)。

CIAの巧妙な策略にみな乗っているよ。大学の内部抗争でほとんどが追い出されたというデマを流し、それらしきケースを作っては新聞に報道させた。そして、自分たちが仕出かしたことの責任を大学当局になすりつけている。[3:47]

---

## 【事例31】 1976／7

五月中旬頃から北を讃えるビラが西大門付近の壁に見られるようになった。中には三・一民主救国宣言を支持するものもあった。五月下旬になると、これをスラム伝道者の仕業だと断定して一名を逮捕した。今度は警察が主動になっている疑獄事件である。街では、そのビラはこのような事件をつくるために警察がしかけたものだという噂が絶えなかった。(中略) それに、これらのスラムの伝道者たちが在日韓国人から資金をもらっていたと警察が極めつけているという噂も、しきりに流れた。[3:91]

このように、流言は、反体制側の中からだけ発生してくるものではなく、体制側によって故意に生み出された可能性があり、また、そのこと自体が反体制側によって流言として語られているのであった。

また、流言を人心操作の手段として扱おうとするのは、体制側にのみありえたことではなく、反体制側にもあった。

## 【事例32】 1973／7

民衆がひどい諦念の下にこんな体制を肯定してしまうのではなかろうか。少なくとも世論でも、ルーマーでも、流言蜚語でも、またビラでも、この国民が完全に眠りこけてしまうことのないように彼らをゆずぶり続けねばなるまい。[1:20]

というように、反体制側は、民衆を覚醒させるための手段として流言を用いようとしていたのである。そしてこの場合、流言が「世論」や「ビラ」と同次元のものとして位置付けられているところに注目させられる。

要するに、体制／反体制の戦いは、さしずめ流言と流言との戦いでもあったということになる。流言のるつぼとは、まさにこうした状況をいうのであった。

## 3 結びにかえて

以上、70年代軍事独裁政権下の韓国・ソウルにおける流言のあり方について眺めてきた。<sup>(6)</sup>もちろん、これを以て当時のソウルにおける民衆の語りのあり方のすべてを理解できるなどというわけでは全くない。本稿はあくまで、フィールド・ワーク開始以前に、問題領域の輪郭をさぐろうと行なう試掘作業にとどまるものである。今後は、この当時の社会を生きぬいてきた人々一人一人に対して聞き書きを行なって、本格的な考察に向かわねばならないが、その場合、1993年の文民政権の誕生以後、独裁政権時代についての語りも白日のもとで行なえるようになってきており、今はまさに研究を進めるにあたっての好機であるといえる(逆にいうと、最近まで、この種の主題についてのインタビューや研究は、それこそ「流言蜚語」として取締、統制の対象だったのである)。

なお、今後の研究の見通しとして、もう一点付言しておく、現代の韓国社会では、政治体制や権力に対する諷刺や間接的な批判をモチーフとした、現代民話としての笑話<sup>(7)</sup>がさかんに語られてきている。こうした状況は、70年代においても存在していたようであり、その際、本稿で見た流言

とその語りの磁場を共有していた可能性がある（前掲〔事例26〕はそのことを示唆している）。現代民話（笑話）と流言との相互関係を、具体的な聞き書きデータにもとづいて追究しながら、この時代の民衆の語りと意識の再構成を進めることが今後の研究課題の一つである。

## 註

(1)——流言の研究は、社会心理学や社会学において成果があげられてきた。〔清水 1947, 南 1962, エドガード・モラン 1973, R. L. ロスノウ/G. A. ファイン 1982, ジャン=ノエル・カプフェレ 1988, 佐藤 1995〕などを参照。

(2)——なお、〈通信〉の著者に関しては、「同書は韓国人による通信という体裁をとっているが、実際には韓国人によって提供された資料を日本の進歩派が編集したものであろう」〔鄭 1995: 29〕とする見方も存在している。

(3)——この当時の日本の論壇において生産され流通していた韓国関連の言説の性格は、自己の政治的イデオロギーにしたがって韓国と関わろうとする「イデオロギー型」〔鄭 1995: 48〕というべきものが主流であり、ここでは、韓国社会に対してかなり恣意的な表象も行なわれていた可能性がある。

(4)——なお、韓国の状況を知ろうとするのに、日本で刊行された資料を用いることに対して、奇異な感を抱かれる向きがあるかもしれないが、言論統制の厳しかった当時あっては、韓国国内において〈通信〉の内容に匹

敵するようなまとまった活字資料が生み出されることはありえないことだった。このため、少なくとも当時において記録された同時代資料としては、日本において刊行されたものであるにもかかわらず、〈通信〉が大きな資料価値を有しているということになるのである。

(5)——以下、資料の引用に際しては、典拠を〔1（書名番号）: 215（頁）〕のように示すが、この場合の書名番号は、1は〔T・K生/「世界」編集部編 1974〕を、2は〔同 1975〕を、3は〔同 1977〕を、4は〔同 1980〕を、それぞれさすものとする。また、引用中、括弧内の記述および下線はすべて引用者が加筆したものであり、さらに、引用文中、文意の通りにくい箇所については、内容に影響を与えない範囲で引用者が若干文章に手を加えている。

(6)——こうした流言をめぐる状況は、軍事独裁政権の続いた80年代に入っても同様に継続していたと思われる。80年代の事例については、いずれ別稿にて検討したい。

(7)——この点については、〔島村 1997a, 同 1997b, 同 1999〕において指摘を行なっている。

## 引用・参考文献

- 李 時載 1987 「戦時中の朝鮮人の流言の研究」『文化と現代社会』（見田宗介・宮島喬編）、東京大学出版会。  
佐藤健二 1995 『流言蜚語—うわさ話を読みとく作法—』有信堂。  
島村恭則 1997a 「世間話の韓日比較」『第31回日本民族学会研究大会研究発表抄録』日本民族学会。  
—— 1997b 「現代韓国社会と『世間話』」『第49回日本民俗学会年会研究発表要旨』日本民俗学会。  
—— 1999 「韓国の現代伝説」『翻訳の世界』24-7。  
清水幾太郎 1947 『流言蜚語』（第2版）、岩波書店。  
池 明親 1995 『韓国 民主化への道』岩波書店。  
鄭 大均 1995 『韓国のイメージ—戦後日本人の隣国観—』中央公論社。  
T・K生/「世界」編集部編 1974 「韓国からの通信—1972.11~1974.6—」岩波書店。  
—— 1975 「続韓国からの通信—1974.7~1975.6—」岩波書店。  
—— 1977 「第三・韓国からの通信—1975.7~1977.8—」岩波書店。  
—— 1980 「軍政と受難—第四・韓国からの通信—」岩波書店。  
南 博 1962 「流言蜚語にあらわれた民衆の抵抗意識」『文学』30-4。  
エドガード・モラン 1973 「オルレアンのうわさ—女性誘拐のうわさとその神話作用—」（杉山光信訳）、みすず書房。  
ジャン=ノエル・カプフェレ 1988 『うわさ—もっとも古いメディア—』（増補版）、（古田幸男訳）、法政大学出版局。  
R. L. ロスノウ/G. A. ファイン 1982 「うわさの心理学—流言からゴシップまで—」岩波書店。

（国立歴史民俗博物館民俗研究部）